

# 第1章

## 2年間の被ばく医療支援を振り返る



平成 23 年 3 月 11 日、東北地方と関東地方を襲った東日本大震災。引き続いて起きた東京電力福島第一原子力発電所事故は「世界の歴史に残る大事故」（国会事故調報告書）となった。その時、広島大学は組織としてどう判断し、行動したのか。

## 被爆地ヒロシマの研究者として 福島復興を全力で支援



緊急被ばく医療推進センター長、原爆放射線医科学研究所長 神谷研二

広島大学は、平成16年に地域の三次被ばく医療機関に選定され、それ以来、新たに組織した緊急被ばく医療推進センターを核にして緊急被ばく医療体制の整備事業を実施してきた。

東日本大震災が発生した平成23年3月11日、私たちは午後から国立呉医療センターで緊急被ばく医療の除染訓練を実施していたが、大地震のためにDMATに派遣要請があったとの情報で急ぎょ広島に帰任した。その夜、突然、内閣総理大臣の原子力緊急事態宣言が発出されたが、福島第一原発の原子炉の状態や環境放射能汚染に関する情報は全くないまま時間が過ぎた。

12日朝になっても国からは何の情報も得られなかった。しかし万が一の被ばく事故に備えるために、私は浅原利正学長のご指導を得て広島大学緊急被ばく対策委員会を立ち上げた。越智光夫病院長や谷川攻一教授にも急ぎょ集まってもらい、十分な情報がないま

ま、とにかく委員会として原発事故に対応するため、まず福島に向けて第1班の緊急被ばく医療支援チームを派遣することを決めた。

私が委員長として広島で指揮を執ることになり、第1班には谷川教授や細井義夫教授ら7人に参加してもらうことにした。12日の午後、放射線医学総合研究所に向けて出発するチームを、捉えどころのない不安の中で新幹線ホームから見送ったことを昨日のように覚えている。

その後、テレビから流れて来る津波の映像や原発事故の情報は、現実とは思えないものだったが、特に原子炉建屋の水素爆発の映像にはショックを受けた。

第1班の派遣以来、37班のチーム延べ1,244人（平成24年3月31日現在）を継続的に福島県に派遣し、福島県、国、放医研、及び福島県立医科大学などとの連携の下に住民の安全・安心のためにさまざまな活動をしてきた。崩壊した緊急被ばく医療体制の再構築や



浅原学長のオフサイトセンターの訪問、国の担当者との意見交換

J ヴィレッジと福島第一原発内に整備された救急医療室の支援、避難住民の汚染検査や健康管理、警戒区域内への避難住民の一時立ち入りの支援、及び福島県立医科大学での内部被ばく検査の支援等々である。

対策委員会には越智病院長をはじめ原医研、大学病院、及び医学部・大学院の関係教員のほか、西田良一運営支援部長、才野原照子看護部長、玖島利男診療支援部長らに加わってもらい、緊急被ばく医療支援活動を霞キャンパス全体で支援していただいた。この体制構築には浅原学長と越智病院長にリーダーシップを発揮していただいた。

委員会の業務は、派遣チームの準備や支援のほかに、大学病院や緊急被ばく医療協力協定病院への患者受け入れ体制の整備、多数の汚染患者が発生した場合の除染テントの設営、ホームページの設置、汚染検査の実施等に及んだ。毎日、住民やマスコミ、行政機関等か

らひっきりなしに問い合わせの連絡が入り、その対応にも忙殺された。西田部長、林茂雄さん、東久哉さんには事務の実務で大変助けられた。

これらの活動の中で私は、福島県知事より放射線健康リスク管理アドバイザーに任命され、県内外で放射線の健康リスクや放射線防護に関する講演を行い、健康管理や放射線知識の普及を図りながら、住民の過剰な健康不安を和らげ、風評被害を防止するために努力してきた。その延べ受講者数は合計 20,375 人（平成 24 年 7 月 31 日現在）に上る。また、放射線専門家として福島県立医科大学副学長に任命され同大学が 205 万人県民の健康を守るために実施している県民健康管理調査に従事すると共に、政府に放射線リスクや放射線防護に関する専門的な助言を行ってきた。

今後も、被爆地ヒロシマの研究者が担うべき役割として福島の復興を全力で支援していく所存である。



住民への放射線の健康リスクや放射線防護の説明会

## 三次被ばく医療機関の責務果たす

学長特命補佐、前病院長 越智光夫



平成23年3月11日午後、地震が東北地方を襲った時、私は会の打合せのため、広島から羽田行きの機内にいた。3月31日で病院長としての2期4年の任期が終わる。その直前の、人生の中でも最も大きな出来事の一つであった。羽田空港からの公共交通機関はすべて止まっており、8時間待ってタクシーに乗り込み、午前2時に予約していたホテルにたどり着くことができた。

3月12日には、神谷研二・原爆放射線医学研究所所長と連絡がつき、国の原子力緊急事態宣言を受けて直ちに「広島大学緊急被ばく対策委員会」を設置した。広島大学は西日本ブロック唯一の三次被ばく医療機関であり、原爆放射線医学研究所、大学病院などが連携し、その役割を果たす責務がある。

緊急被ばく医療に関する医療支援チームや専門家の派遣、住民の汚染検査と資料管理、住民や学校・行政等に対する放射線影響に関する情報の提供である。これらを神谷所長、高度救命救急センターの谷川攻一教授を中心に積極的に行ってきた。緊急被ばく医療チームの活躍は福島でも目覚しく、大変頼もしく、誇らしい感じをずっと抱いていた。

病院長として、また4月から広島大学理事（医療担当）として、私が病院サイドで主に関わったことは、被ばくして緊急治療が必要な方が送られてきた時の受け入れ態勢の準備である。少数の場合は入院棟1階の

高度処置室での除染、多数の場合はレジデントハウス駐車場で行うこととした。反対意見もあったが、除染テント4張を設置した。搬送ルート決定のため、県内協力医療機関との患者振り分け順序等の調整をした。機器及び医薬品に関しては除染関係、ホールボディーカウンター（WBC）のセットアップ、医薬品等の準備を行った。

現地は医薬品、水、食料が不足していると考え、直ちに病院の保存食を半分送るように決めた。しかし輸送手段がなく、西田良一・前病院運営支援部長と相談し、浅原学長の了承も得て広島大学のワゴン車を使用することとした。保存食を満載した車がタイヤを軋ませながら出ていくのを見た時、この大惨事が一刻も早く終息してくれることを心から祈った。

3月30日、福島市に向かった。福島県の佐藤雄平知事と県立医科大学理事長・学長の菊地臣一先生にお会いし、今後の広島大学の支援の在り方を話し合うためであった。まだ道路は至るところに地震による災害の爪痕が残っており、ガソリン待ちで並ぶ車も多く見かけた。

その日嬉しいこともあった。食料品を送った車が現地で活躍していたこと、整形外科を通して長年知り合いであった菊地先生が訪問をことのほか喜んでくれたこと、神谷所長の福島県放射線健康リスク管理アドバイザー就任が正式に決定されたことなどである。佐藤知事、県議会議長をはじめ多くの方々とお会いしながら、広島大学病院はずっと福島に寄り添い、ご支援させていただくことを約束した。

緊急被ばく医療チームは医師、看護師、放射線技師、事務職員をはじめとして多くの方が福島に赴き、延べ人数は1,300名を超えている。広島大学の職員に尊敬と感謝をささげ、一日も早い福島の復旧・復興を心より祈念して、筆をおくこととする。



佐藤雄平福島県知事(中央)と固い握手

## 正確な知識の大切さ痛感

理事・副学長、病院長 茶山一彰



平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、太平洋三陸沖を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は最大震度 7 という巨大な地震であり、それに伴って発生した津波を含めて東日本一帯に甚大な被害をもたらした。まずはその犠牲者、ご家族の方々に深く哀悼の意を表したい。

当日の午後 3 時から、広島市民病院で当時市民病院病院長であった大庭治先生と面会予定であった私は、テレビ画面の津波の映像にわが目を疑った。

それに継ぐ原発事故。どこまで真実が報道されているのかを確信できないまま、対策本部となった広島大学病院中会議室で、当時病院長であった越智教授と落ち着いた時間を長く過ごすことになった。

西日本ブロックの三次被ばく医療機関として広島大学から数多くの医師、看護師、放射線専門家、事務職員が現地に赴き、原発従事者、周辺住民の健康確認や医療、相談対応に従事することになった。最初の派遣部隊の一員として、私の所属する消化器・代謝内科出身の平田大三郎助教（現マツダ病院勤務）が出向していた。彼は本学原爆放射線医科学研究所所長の神谷研二教授の下で被ばく対策に当たった現地の生々しい様子を伝えてくれた。

平田医師は固形の携帯食料とペットボトルの水をポケットに入れて出発した。初日から数日間は食料も飲み水も自分が持って行ったものだけ。トイレの水も近くの川からバケツでくんできて流すといった状態だったという。彼は原発で傷病者が発生した場合の搬送を検討する会議などに出席しながら、さまざまな情報を収集してきてくれた。

彼が持ち帰った写真には、患者輸送用ヘリコプター

で外傷患者を輸送した時の緊迫した雰囲気や、防護服とマスクに身を包んで傷病者の救出に向かう救急医学教授で派遣チーム第一陣のリーダーであった谷川攻一先生の様子が写されていた。宿泊施設で自分の持ち込んだ携帯食料ばかり食べていた数日後、出されたカレーのおいしさに感動したという話を聞いて、私たちは日々何不自由ない暮らしをしていることに改めて気付かされた。

幸い私が病院長に就任して以降、支援体制は徐々に縮小することが出来ている。震災発生から 2 年を迎え、被災地で悲惨な状況を見ることはほとんどなくなっている。しかし以前の居住地に戻る事ができた住民も、除染作業の遅れや放射性物質のもたらす影響に関しての誤った理解による風評被害に悩まされ、なかなか元通りとはいかない現状が報告されている。そうした姿を眼にするにつけ、正確な知識の提供・普及の大切さを痛切に感じる。引き続き原医研と連携して、その務めを果たしていきたいと考えている。



福島に赴くスタッフを見送る（広島駅）

## 気の抜けない日々を過ごす

前広島大学病院運営支援部長、ヒロシマ平松病院事務長 西田良一



恥ずかしい話ではあるが、地震発生時、津波により大変な事態が生じるとは全く想定していなかった。テレビで津波の映像を見ても、福島第一原子力発電所がその後非常事態に陥るなど考えも及ばなかった。

平成23年3月11日は越智光夫理事・病院長が東京出張中であった。安否確認と共に今後の対応について連絡を取ろうと試みたが、携帯電話が繋がらない状態が続き、頭の中は不安が渦巻いていた。やっと電話が通じたのは、翌12日未明であったと記憶している。

その後は、越智先生や浅原利正学長の指示を受け、広島大学が西日本ブロックの「三次被ばく医療機関」であることも踏まえ、緊急被ばく医療推進センター長の神谷研二先生を筆頭にさまざまな支援を開始した。裏方の責任者として、6月末に広島大学を去るまで気の抜けない日々を過ごした。

DMA Tチームは地震当日の夕刻いち早く車で出発した(呉から自衛艦で横須賀経由現地へ)。翌日に「広島大学緊急被ばく医療対策委員会」が立ち上がり、大学病院外来棟3階中会議室を拠点に、職員派遣や現地との連絡調整、法人本部との折衝等で、医療政策室の林茂雄リーダーや緊急被ばく医療推進センターの東久哉主査ともども土日もない状況が続くこととなった。

しかし振り返ってみて、いつ終わるとも知れないこの活動も全く苦にならなかった。活動に不可欠なヒト、モノ、カネについて、全く不安を感じる事がなかったことが

大きい。これも浅原学長、越智理事、茶山一彰病院長及び神谷センター長の後ろ盾があつてのことだった。と

いうのも、長崎大学が経費面を理由に看護師派遣を縮小するという話を聞いたからである。

人員派遣は病院だけでは負担が大きいため、放射線技師は技術センター、事務職員は法人本部の支援を受けた。4月18日から福島大学事務職員OBを現地採用できたおかげで随分助かった。河本朝光理事や竹内哲弘秘書室長の側面援助があったことも忘れない。

この間、私自身が現地に赴いたのは一度だけだった。浅原学長が福島県立医科大学・広島大学・長崎大学の連携協力調印式出席のため、現地に向かれた際に同行した。まだ東北新幹線が復旧しておらず、ダイヤも変則だった。終着の那須塩原駅から広島大学の派遣車両で約100km離れた福島に向かった。途中の高速道路が波打っていたのが記憶に残っている。オフサイトセンター等も視察したが、日程がタイトで、本学職員の慰労に時間を割けなかったことが悔やまれた。

災害支援で感銘したことが多くある。神谷センター長や細井義夫教授の活動はもちろん、現場では谷川成一教授、廣橋伸之准教授、岩崎泰昌講師以下救急科の先生方の献身的な働きに心から敬意を表する。貞森拓磨先生には、テレビ会議システムや現地派遣車両2台との無線通信・位置情報確認システムを構築していただいた。どれだけ支援活動に役立ったか計り知れない。

今回の災害は一面、人災といえるものがあつたことは否定できない。私は広島生まれ広島育ちであり、平和公園を訪れることが度々ある。今回改めて感じたことは、慰霊碑の碑文のことである。

「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」の碑文をめぐる議論があることは承知している。ただ、今回の震災をはじめ人災を繰り返さないことが、われわれに与えられた課題であることに論はないと思う。いま一度この碑文の示唆を肝に銘じたい。



刻々と変わる状況に対応して開かれた緊急被ばく医療対策委員会の会合